通所介護における
ケアの数値化がもたらすもの
第二報

～主観的QOL等スケール分析を通じて～

デイサービスはなぶさ
発表者　中馬　健一（介護福祉士）
共同演者 川上　裕子（看護師）濵田 ひとみ（准看護師）

≪はじめに≫

昨年度は・・・

①BMI値と主観的QOLとの間に有意な相関関係を認めることになった。

②それから1年経過したことから、今回は継続的に当事業所を利用している利用者を中心に各種データの比較・再分析を試みたので、その結果をここに報告する。

≪対象者・方法≫

●デイサービスはなぶさ利用者18名

☆対象者:【平成30年8月～令和1年9月まで継続利用している要介護1～5利用者　男性6名、女性12名 平均要介護1.9　年齢(76±99)歳】

☆方法:

（１）平成30年8月～9月(以下、1回目)のスケール評価データと令和1年8月～9月(以下、2回目)評価データを比較分析

（２）1回目及び2回目のBMI値と主観的QOLの相関関係を分析

≪対象者・方法≫

☆スケール内訳☆

■ADL(日常生活動作)

①バーセルインデックス(BI) ②FIM

■IADL(手段的日常生活動作)

③IADL尺度　④FAI

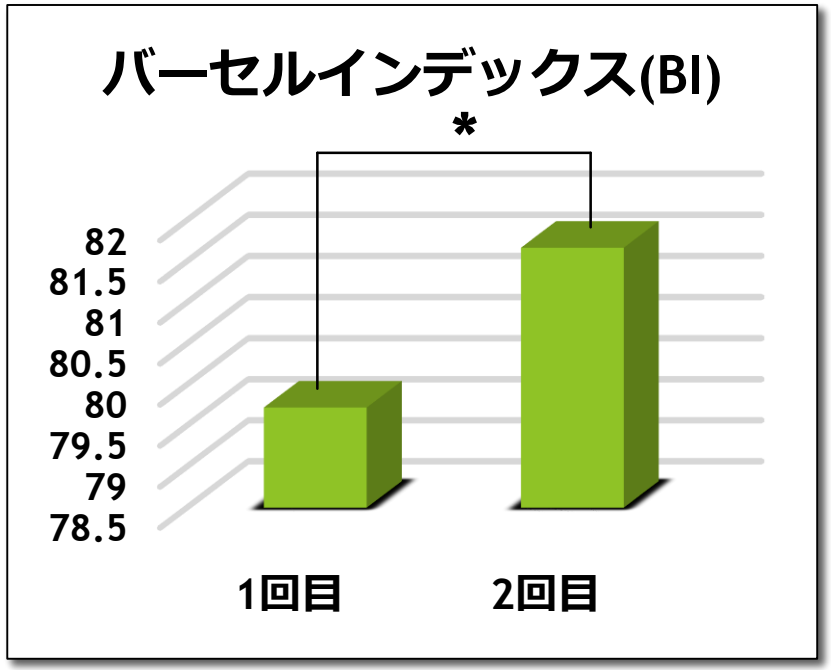
■認知機能　**⑤MMSE**

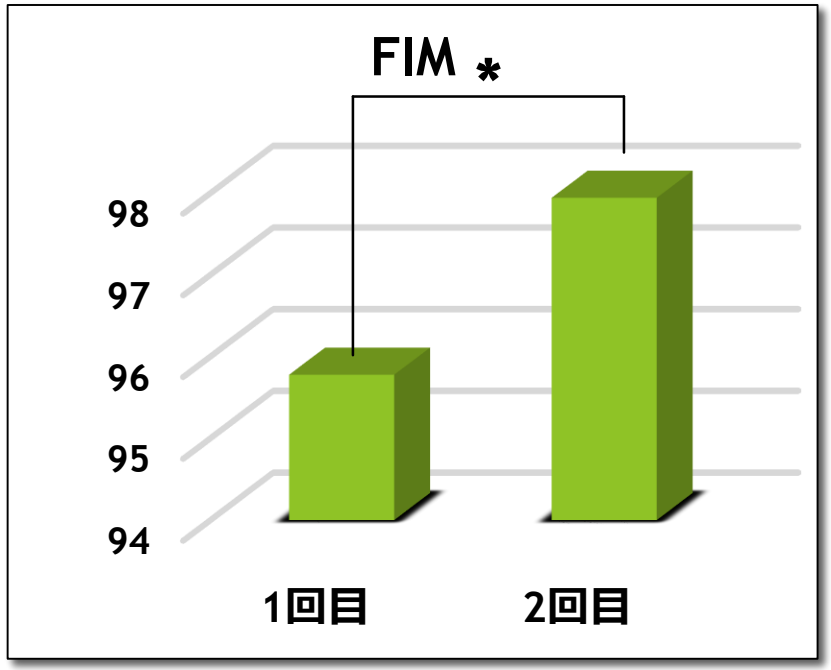
■QOL(生活の質)

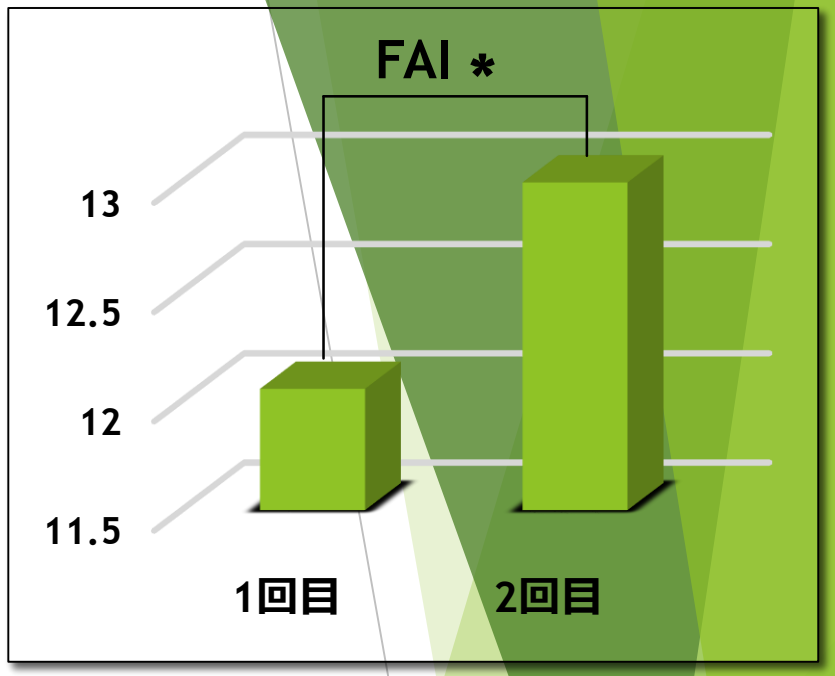
⑥RCGモラールスケール(主観的QOL)

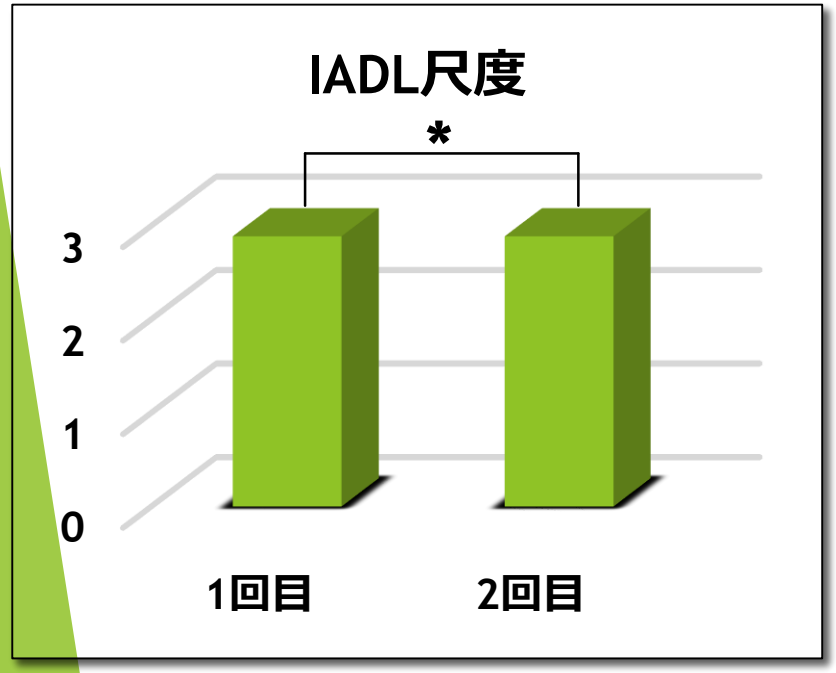
≪結果≫

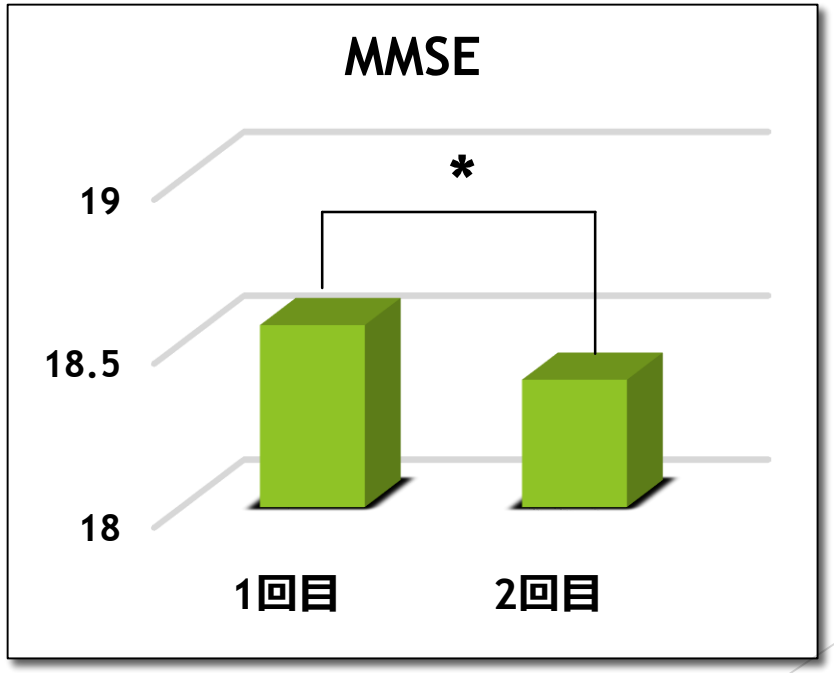
（１）MMSEとIADL尺度を除くスケール評価において平均値は改善した。そこでt検定を行ったが何れも有意差は認められなかった（$p>0.05$）。また、MMSEやIADL尺度も悪化したとまでは言えない。

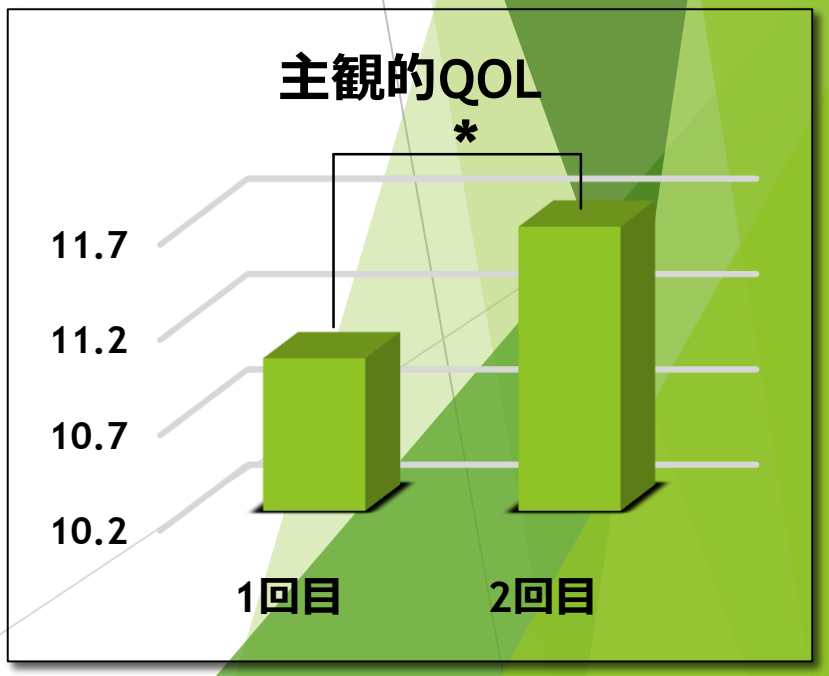








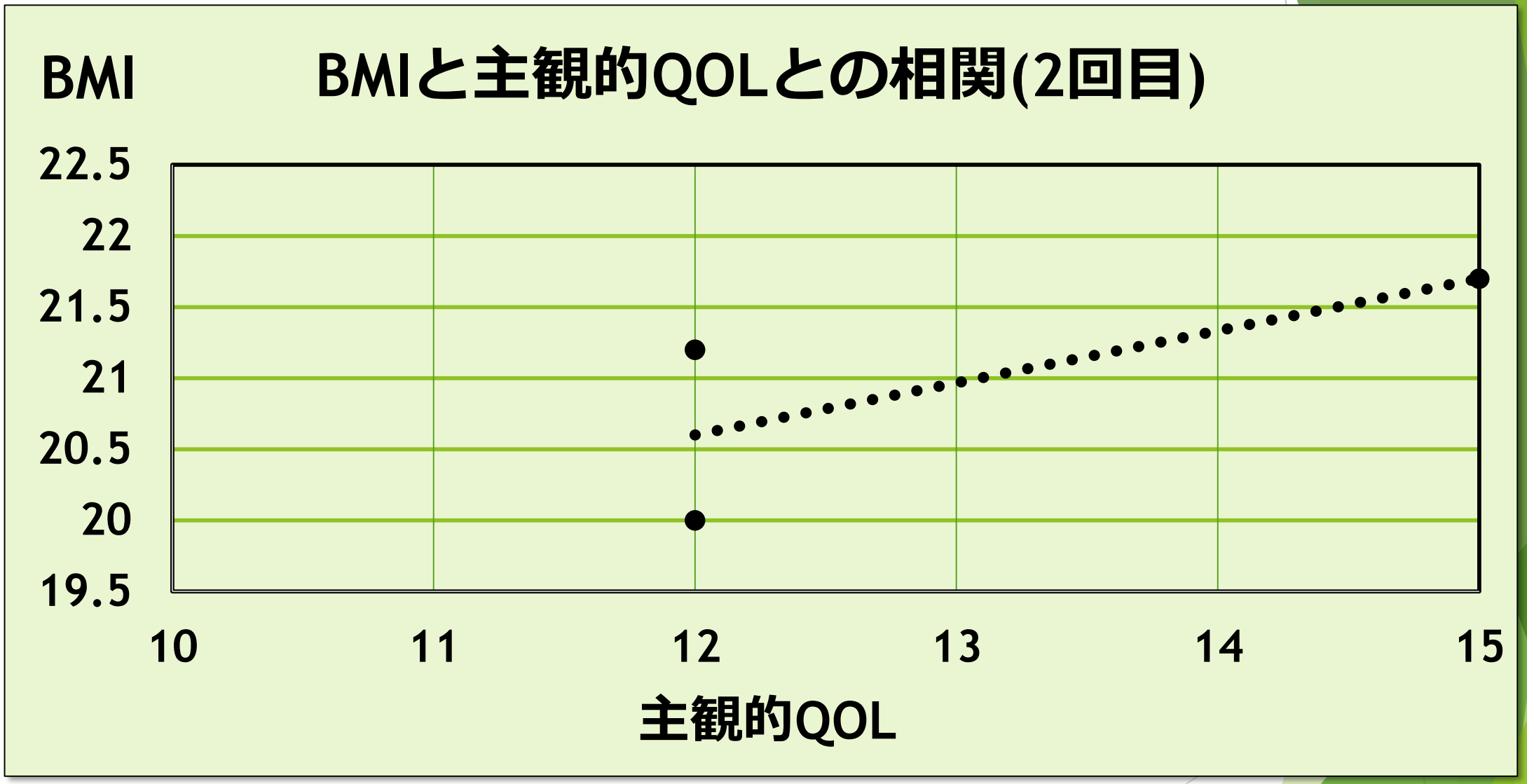




*n.s. : nonsignificant n=18 1回目・・平成30年 2回目・・令和元年

≪結果≫

(2)BMI値と主観的QOLにおいて1回目は正の相関（r=0.489276）、２回目は弱い正の相関（r=0.289737）となった。そこで外れ値を除外して再分析を行ったところ、2回目のみ強い正の相関（r=0.7269）を認めた。


BMI
BMIと主観的QOLとの相関(2回目)
22.5
22
21.5
21
20.5
20
19.5
10
11
12
13
14
15
主観的QOL

r=0.7269　n=18

≪考察・まとめ≫

●数値上は改善していたが統計上の明らかな有意差はなかった。当事業所のケアに対する取り組みは良い方向へ向かっていると思われるが、今回はその要因を断定出来るだけの要素を見出すことは出来なかった。

●結果を見る限りは、当事業所の取り組みによる相乗効果が少なからず影響しているのではないかと推察する。

スクワット
立ち上がり

園芸
工作

食事準備
片付け等
の役割

集団レク
調理レク

≪考察・まとめ≫

●対象者内の2名に関しては通所リハビリを併用しており、何れもBI、FIMを中心に確実な改善を認めていることから、通所リハビリとの併用利用効果が含まれると思われる。

●BMI値と主観的QOLの相関関係については、今回も部分的ではあるが相関関係を認めることになった。

●こうした分析を踏まえた上で、今後も利用者が活き活きと生活を続けられる環境作りに努めていきたい。